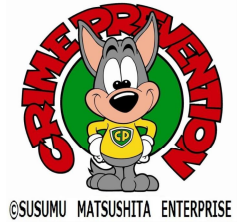


画面の向こうの心

島根県島根大学教育学部附属義務教育学校 8年 中澤 宇美菜



これまで私は「ネット内でのいじめ」という言葉をたくさん聞いてきた。私は他人事としてしか受け止めていなかった。しかし、ある出来事がきっかけで、その言葉を聞くと気をつけようという気持ちに変わった。

私は中学から部活動に入り、大好きな仲間ができた。部活の仲間の人数は少なく、みんなで話すのが当たり前だった。ある日、すれ違いによって三対一のようになってしまっていた。私は三人の方にいたのでどの様にして声をかければいいのか分からなかった。大切な仲間が部活を辞めてしまうかと思った私は、すぐに部活内のグループラインで話し合うことにした。

その時の私は、ネットでは相手の顔が見えない分、四人全員が思っていたことを言えるかと思っていた。しかし、それは私の勝手な思い込みで、実際はそうではなかった。ネットの中でも三対一になってしまっていることに、もうどうしたら良いか分からなかった。私の気持ちとしては、「もう一度みんなと楽しく部活動がしたい」だったのに、結果的にはその子が責められているような空気になってしまった。何とかしたいけど、どうにもできない、本当の気持ちが届かないもどかしさで胸がいっぱいになった。

その時私は思った。現実で顔を見て話すことが大切だったのではないかと。相手の顔が見えない分、相手がどんな表情で、どんな事を思っているのかも、間の取り方も分からない。たった一つの言葉でも読み手にとってはたくさんの受け止め方がある。その結果、自分の伝えたいことが上手く伝えられず、トラブルになってしまうということが増える。

その後、私は一人になっていた子に勇気を出してラインを送った。とても勇気のいる事だったけど、謝らないといけないという思いでいっぱいだったからだ。その子から思っていたことを聞いてみた。そうすると、私が仲直りしようと思って送ったラインはとても辛かったと知った。本当に申し訳ないことをしたなという気持ちになった。

誰かが悲しい、辛いと思っていたらそれに気づいて声をかけられる人になりたい。優しさって特別なことじゃない。ちょっとした気づかいだったり、相手を思う気持ちだったり、当たり前のことを大切にしていきたい。

この出来事の後、私は誰かに何かを送るたびに、「これで大丈夫かな」「嫌な気持ちにさせていないかな」と何度も見返すようになった。でも、それは悪いことじゃなかったと思う。言葉の大切さに気づけたからこそ、自分の言葉に責任を持つようになったし、相手の気持ちを考えることが増えた。むやみに S N

Sで連絡を取ったり、勢いで何かを送ってしまったりする前に、「これって今、送る必要ある？」「どんな気持ちで読まれるかな？」と考えるようにしている。

例えば、怒っている時にはすぐにメッセージを送らず、少し時間を置いたりする。そして、もし相手に謝りたいと思ったら、できるだけSNSではなく直接相手の顔を見て謝ること。それが、相手の心にまっすぐ届く一番の方法だと思う。

私が経験したことは、小さなすれ違いから始まった。でも、その小さなズレがだんだん大きくなって、気づいた時には関係が壊れかけていた。それがネットの世界の怖さでもあるし、人と人のつながりの難しさだと思う。それでも、私はこの経験をしてよかったと思っている。自分が相手の立場だったらどう感じるか、言葉の重みとは何か、人との距離をどうやって保てばいいのか、たくさんのことを学べたからだ。

今でも、全部が完璧にできているわけではない。時にはまた迷ったり、どうすればいいのか分からなくなることもある。でも、そのたびに「人を大切にすることってどういうことだろう」と立ち止まって考えたい。

私はこれから「やさしい選択」ができる人になりたい。誰かを傷つけないことはもちろん、困っている人に気づける人でありたい。面と向かって「ごめんね」と言える勇気、誰かの不安にそっと寄り添えるあたたかさ、そういう小さな力を大切に育てていきたい。

私たちの毎日は、たくさんの言葉でできている。その言葉が、誰かの心を温めたり、笑顔にしたりする力を持っているのなら、私はやさしい言葉を選びたい。そして、画面の向こうにも心があることをずっと忘れずにいたいと思う。